安芸市（あき）（高知県）

市民力に支えられた財政再建を糧に 目指すは《こころざし》が光るまち

財政再建成功と同時に訪れた『龍馬伝』ブーム

高知県安芸市は平成22年、NHK大河ドラマ『龍馬伝』の相乗効果で大いににぎわった。平均視聴率20％以上の『龍馬伝』に全編を通じて主要登場人物として描かれた、三菱財閥・三菱グループの創始者・岩崎弥太郎の生まれ故郷ということもあり、各方面からにわかにクローズアップされるようになったのだ。

高知県では『龍馬伝』の放映に合わせて平成22年1月16日～23年1月10日まで、高知市を中心に《土佐・龍馬であい博》が開催され、県内4カ所のイベント会場には90万人の観光客が詰め掛けた。安芸市は人口2万人だが市役所の横に設けられた《土佐・龍馬であい博》サテライト会場・こころざし社中には11万人、岩崎弥太郎生家には21万人の観光客が訪れた。歴史上最大の観光客でにぎわう安芸市には、財政再建の暗い雰囲気がなく新たな市政発展へと向かう元気なまちであった。

安芸市役所は市域南部の土佐湾に程近い場所に立地しており、岩崎弥太郎の生家は市域北部の山側にある。両者を結ぶ道程の中間地域には、安芸市のシンボル・野良時計（明治20年代に設置され、付近の人々に時を教えた西欧式の大時計）や書道美術館、歴史民俗資料館、武家屋敷街（土居廓中）など、市内の観光名所が美しい田園風景の中に点在している。平成22年度に安芸市を訪れた観光客の多くも、この《土佐・龍馬であい博》サテライト会場・こころざし社中と岩崎弥太郎の生家を訪ね、その間に点在する市内名所を通して安芸市の歴史や風光を楽しんだ。

このようにブームに乗って急増した観光客をいかにリピーターにつなげていくかについては今後の工夫に掛かってくるが、安芸市にとってこの平成22年度が、『龍馬伝』によってその名を全国に力強く発信された時期であることは、今後、長く記憶されていくだろう。

平成22年度はまた、安芸市にとって別の意味でも、記念すべき年度であった。安芸市は平成20年度決算で早期健全化団体に指定されたことにより、地方公共団体の財政健全化に関する法律に基づく個別外部監査を受け、財政健全化計画を策定するに至った。しかし、早期健全化団体となった翌年の平成21年度決算において、早くも早期健全化団体から脱することができたのだ（財政健全化団体の指定解除は22年度）。

松本憲治（まつもとけんじ）
安芸市長

財政再建を後押ししたのは市民の力

その陣頭指揮を執り続けてきた松本憲治安芸市長は「安芸市といえばここ数年は財政破たん寸前のまちとして、ありがたくない形で有名になってしまいましたが、大河ドラマ『龍馬伝』効果と、財政健全化の達成で得た自信によって、後々、平成22年度が安芸市の飛躍の年であったと位置付けられることを望みたい」と明るい表情で語る。そして今回の財政再建への努力が所期の目標を達成できたのも、「ひとえに財政再建に対する安芸市民の理解と粘り強い底力、そして何より市職員の一致団結したパワーのおかげ」と強調した。

松本市長が安芸市職員として環境・健康ふれあい・市民・企画財政などの各課長を歴任後、市長に就任したのは平成13年。既に大きな財政赤字を抱えていた安芸市政を、徹底的な行財政改革によって立て直すことを最大の目標に掲げての出馬だった。

安芸市民が松本市長のこの主張を大きな危機感とともに理解し、支持したことは、平成17年度（2期目）および21年度（3期目）の市長選で、いずれも無投票当選となった事実が如実に物語る。市民の全面的な支持が、財政再建を後押しする最大の力になったのだ。

市役所横に設置された《土佐・龍馬であい博》サテライト会場

三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎の出身地は安芸市

『龍馬伝』ブームで多くの観光客が詰めかけた岩崎弥太郎生家

松本市長が就任後まず行ったのは『安芸市緊急財政健全化計画（アクションプラン）』の策定（平成15年度策定、平成16年度見直し）と、同計画に基づいて「市民の負担は最小限に抑えながら、行政経費の徹底的な見直しや組織のスリム化による財源不足の解消」への取り組みだった。主な取り組みポイントは次の通りである。

【歳出対策】

- 退職者補充を抑制して職員数を29％削減
- 7年連続にわたる給与などのカット（平成16年度～。特別職給料10％、特別職退職金10％、一般職給料3～5％、管理職手当50％、期末勤勉手当役職加算20～30％などのカット）
- 財政危機を招いた最大要因でもある普通建設事業の大幅抑制（平成14～22年度当初で75％抑制）
- 市債発行額の抑制と90億円を繰上償還して市債残高を減少
- 保育所の統廃合・民営化、図書館などの民間委託
- 県内出張時の日当の全廃など

【歳入対策】

- 市税収納率向上対策（強制執行、差し押さえなど）
- 保育料、家賃など滞納整理の強化。訪問徴収の中止
- 個人市民税特別徴収の100％実施
- 使用料、手数料の見直し
- 職員駐車場の有料化など

安芸市はナスの栽培量日本一
（ナスを栽培するビニールハウス群）

その結果、平成9年度に398名だった職員数は平成22年度には277人にまで減少された。平成10年度に25・9億円だった普通建設事業にかかわる市債発行額は平成21年度で3・5億円に抑制された。市債残高も平成14年度に239・5億円あったのが、平成21年度には159・9億円に減少し、平成26年度には117億円程度にまで減少される見込みとなっている。

「現在は緊急財政健全化計画も第三次計画（平成21～25年度）に入っており、実質公債比率も平成21年度に24・6％となって早期健全化基準（25％）を下回り、平成26年度には17・6％にまで下降させる予定です」（松本市長）

だが当然のことながら、行財政改革に終わりはない。安芸市の場合にはむしろいったん財政再建の成った現時点以降の「油断のない引き締め」が、より重要になることは言うまでもない。松本市長はこの点について、予算の肥大化を避けるための事務事業評価システムを活用した事業精査とともに、すべての補助金についての終期設定の実施のほか、中長期財政シミュレーションの確立、各種基金の計画的な積み立て、緊急的課題や将来への発展につながる事業などを優先した「施策の選択と集中」などの重要性を掲げ、職員にさらなる意識改革を求めている。

安芸港に水揚げされるちりめんを活用した「釜揚げちりめん丼」は安芸市の新名物

再整備を待つ安芸市の「宝」たち

松本市長は「約8年間掛けて実施してきた財政健全化が一区切りした今こそ、活気あふれるまちづくり、例えば観光振興を推進する大きなチャンス」だとも語る。そして活気あふれるまちづくりの原動力としては、江戸・明治・大正・昭和に培われた各種の「資源」を挙げる。

もともと安芸市は「歴史と文化の香るまち」というキャッチフレーズで独自の歴史・文化資産を地道に発信してきた。

例えば土居廓中に今も残る武家屋敷街は、土用竹やうばめ樫の生垣に囲まれ、ほかの地方の武家屋敷街とは明らかに異なった、厳格・質朴な中にも陽気な黒潮文化を想起させる独特の雰囲気をたたえている。今回の『龍馬伝』ブームで安芸市を初めて訪れた観光客にも、岩崎弥太郎の生家とともに、こうした独特の雰囲気を放つ土居廓中の武家屋敷街は、とりわけ強い印象を残したようだ。

また「雀の学校」「お山のお猿」「春よ来い」「叱られて」「浜千鳥」「雨」「咲いた桜に」「鯉のぼり」「金魚のひるね」「靴が鳴る」などの名作童謡の作曲で知られる弘田龍太郎の曲碑もある。これは童謡のイメージに合致した楽しい意匠の石碑（素材はさまざま）で、海辺、田園、市街地など市内10カ所に設置され、近づくとメロディが流れてくる仕組みになっている。

まちづくり事業としても、安芸市では昭和62年から《童謡の里づくり》を行っており、昭和63年から平成12年までは《安芸童謡フェスティバル》を開催するなど、童謡を地域の音楽文化としてはぐくむ各種施策を実施してきた。

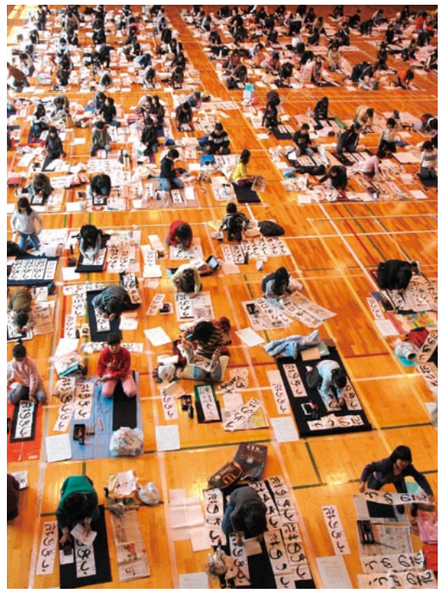
平成14年度から本格化した行財政改革の関係などもあり、その後は目立った展開をしてこなかったが、財政再建が成った今、新たな発想からの《童謡の里づくり》が期待されるところだ。

また、昭和57年に、全国初の市立書道美術館を開館させたことからも分かるように、「書のまち」としての安芸市の名声は既に全国的に知られている。市民自らも「安芸は書道王国」と誇るほど、安芸市からは川谷横雲・尚亭兄弟、手島三兄弟、金子鷗亭、村上三島、日比野五鳳など、日本の書道史にその名を残す大家が歴代輩出されてきた。

毎年行われる『安芸全国書展』は全国公募の書展としては全国有数の規模を誇っており、書のまち・安芸市は今も確固たる地位を築いている（市制50周年の節目となった平成15年度からは高校生大会を開催、平成20年度から高知県小中学生選抜書展も開始）。

このように安芸市にはさまざまな「資源」が

安芸市立書道美術館は全国初の公立書道美術館


安芸市では全国規模の書道大会がしばしば開催
（小中学生選抜書展決勝の模様）

数々の名作童謡を送り出した弘田龍太郎の曲碑

毎年12月開催の安芸市タートルマラソンは、タイムを競わない健康マラソンの元祖（平成23年12月で36回目）

あるわけだが、これまではそれらの資源をもう一つうまく生かしきれていなかった。松本市長は「今回の『龍馬伝』ブームに連動した各種の観光振興事業によって、行政・事業者・市民がそれぞれの立場から地域を盛り立てようとするエネルギーとなり、まちおこし運動が展開できていると思う」と語っている。

実は今回、松本市長自らのご案内で、取材者はこれら安芸市ならではの文化・歴史資源の数々を訪ねるという望外の機会を持つことができた。その訪問先には閉幕間近の『土佐・龍馬であい博』サテライト会場や岩崎弥太郎の生家も含まれていたが、その過程で強く印象に残ったのが、多くの観光客の入込をスムーズに受け入れるための動線確保の工夫だった。

安芸市に限らず四国各県の道路事情は、後に述べる四国全県を結ぶ高速道路交通網の整備の遅れとともに、一般道路の道幅の狭さという共通の悩みがある。

安芸市の観光資源を結ぶ道路の幅もほとんどは農道に近く、外部からの訪問者には対向車との擦れ違いに苦慮するような場所が少なくない。しかも安芸市は厳しい行財政改革の真っ最中であり、道路整備に割く予算も限られている。そこで実施されたのが、観光客が多く利用しそうな道路の徹底的なリサーチと、擦れ違う際のルールづくりだった。道幅の一部広くなっている場所をフルに活用し、整然と車が行き交えるよう、観光事業者に対する指導、観光客に対する情報提供に努めた。

その結果、大きな問題が発生することもなく、『土佐・龍馬であい博』も先ごろ、無事に閉幕を迎えた。こうした限られた条件の中での知恵と工夫の凝らし方は、財政再建へのさまざまな努力にも通じるものだろう。

ナスと並んで日本一の生産量を誇るユズの出荷風景

四国8の字ネットワークへの強い思いと安芸市の今後

安芸市だけでなく、道路整備は今後の四国全体の経済発展を考える上で欠かすことのできない最大の課題の一つといえる。一般道路の狭さもさることながら、愛媛県南部と高知県西部・中央部、徳島県南部と高知県中央部・東部を直接結ぶ高速道路がない。

「四国には新幹線もなければ、四県すべてをつなぐ高速交通網もありません。高知県では高知市周辺まで高速道路が整備されていますが、高知市から安芸市までは狭い国道が一本あるだけです。『土佐・龍馬であい博』の期間中も、高知市と安芸市を結ぶ高速道路があればもっと多くの観光客が詰め掛けたはずです。また毎年春に行われている阪神タイガースの安芸キャンプの折りにも、高知市から安芸市までの交通アクセスはその狭い国道と、本数の少ない鉄道（ごめん・なはり線）だけという状態が続いています。この現状を解消するには『四国8の字ネットワーク』といわれる高速交通網を一刻も早く完成させるしかありません。これは全体に道路事情の悪い四国の中でも、特に不便を強いられている高知県東部や西部に暮らす市民すべての強い願いなのです」（松本市長）

四国における高速交通網は各県の境界部に鎮座する山間地帯を避けて延伸する形をとったため、まず四国縦貫自動車道と四国横断自動車道が四国中央部でX字形に交差し、この道路が四県それぞれの県庁所在地につながった時点（平成12年ごろ）でエックスハイウエイと通称されるようになった。8の字ネットワークはこのエックスハイウエイの先をさらに延伸し、四国の外周を横8の字形に結ぶ計画が立てられたことから、そう呼ばれるようになった。

四国8の字ネットワークが完成することの意味は、単に四国内の高速交通網が完成するというだけにとどまらない。四国の高速交通網による周遊が容易になれば、神戸・鳴門ルート（神戸淡路鳴門自動車道）、児島・坂出ルート（瀬戸大橋）、尾道・今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）を通じて中国地方・関西地方との連携もさらにスムーズになり、時間面にも安全面にも、さらに経済的にも観光客の快適性を高めることになる。

「日本は今、ビジット・ジャパン事業をはじめ、外国からの観光客誘致に国を挙げて努めています。私は3年前に中国各地を訪問しましたが、その際に強く印象に残ったのは、高速道路交通網のネットワーク整備が非常に進んでいることでした。高速道路のネットワークが経済成長や観光振興を支えているのを目の当たりにしたのです。日本も観光立国を目指すのであれば、いまだ道路に関しては発展途上国並みというしかない四国の現状に目を向けていただきたい。

観光振興や物流的な意味だけでなく、地方にとって道路は、電気、水道、ガスと同等のライフラインである。台風時の通行規制の解消、救急搬送の時間短縮などの地域事情を解消するために高知東部自動車道の芸西村・安芸市間（8・5㎞）の新規着工が23年度予算で決定した。正に画期的な決定であり、涙が出るほど嬉しくガッツポーズをした。今後も国には四国8の字高速道路の完成を目指し、要望活動を粘り強く続けていきたい」と松本市長は力説する。

このような地域の将来にかかわる大きな課題もあるが、現状で考えられるギリギリの条件の中で、見事に財政再建という大きなハードルを乗り越え「こころざしを遂げた」安芸市を包む空気には、早春の曙光のように前向きで明るいものが感じられた。

財政再建は安芸市にとって、例えれば明治維新のようなものではないだろうか。土佐の革命戦士・坂本龍馬が志し、準備した日本の近代への礎を、近郷・安芸出身の岩崎弥太郎が維新後に経済の面で発展させていったように、安芸市の21世紀における「新たな近代化（発展）」は、今、始まったばかりだ。

（取材・文　遠藤　隆）

安芸名物・タイガース列車は全国阪神ファンの憧れ

阪神タイガースの安芸キャンプには全国の虎党が毎年大集合